

## あとがき

「本を読むのと書くのは大違いである」——2016年に『通常内視鏡観察による早期胃癌の拾い上げと診断』を書き終えたときの感想である。この執筆には3年間の年月を要し、更に2年かけて英語版を作成した。子供のころから作文が苦手な私にとって大きな仕事であった。そして、5年間の執筆で燃え尽き、もう書籍は書かないと心に誓った。

しかし、時間が経つと、「もっと伝えたい」という気持ちがムクムクと湧き上がり、再度筆をとった。誰に何を伝えたいと思ったのか？ それは、過去の自分だ。15年前——内視鏡をそれなりにできると勘違いしてがん研に入局したころ。中途半端な知識と技術しかなかった「あのころの自分」に、適切なアドバイスを伝えなかったのである。私は文字だらけの難しい教科書を読むと眠くなってしまふ。そんな私でもスラスラと楽しく読めて、納得しながら内視鏡の本質を理解できる、そんな書籍を目指した。そして、「あのころの自分」に対して、「いますぐ読め！」と言いたい本が完成した。内視鏡を握るすべての人に読んでほしい本に仕上がったと自負している。

さて、今回も多くの先生のお力を借りた。病理監修の河内洋先生、関西弁翻訳の中尾栄祐先生がいなければこのクオリティーを出すことはできなかった。他にもがん研の先輩、同僚にも多くのアドバイスをもらい、画像・動画を提供してもらった。院外の先生にもメールでずけずけと質問したにも関わらず、みなさんから丁寧な回答をもらい、本書に活かすことができた。この場を借りて、深くお礼を申し上げたい。

前著のノウハウがあったので、今回の書籍は半年ぐらいで書きあがると高をくくっていた。しかし、「伝わる」ということに拘って、試行錯誤をつづけた結果、3年の月日が流れてしまった。途中、終わりが見えない状態が続き、辛い日々もあった。そんな日々を乗り越え、多くの人のお力を借りながら、なんとか書籍を書き上げることができた。

こうして、苦勞して書き上げた本を手にする時、  
涙が込み上げてくる。  
今宵は、とても旨い酒が飲めそうだ。

それでは、「この本が世界の内視鏡医の役に立つこと」を願って、  
乾杯！



2022年 秋 純米大吟醸「洗心」を呑みながら

平澤俊明